

ヘミングウェイ、フィッツジェラルドとの出会い

佐藤 英夫

1.

ヘミングウェイの交遊パターン——とりわけ、かけ出し時代において——を見てみると、どうしても次のような結論に達せざるを得ないようである。つまり若き日のヘミングウェイは、自分を引き立ててくれたり、自分に強い影響を及ぼしてくれた先輩作家たちからの独立に関しても、彼らに負い目のないことを宣せずにはいられなかったようである。

ヘミングウェイの作家仲間、疎遠ながらも何とか縁をもった人の数はごく僅かであったとされている。Ezra Pound——1885～1972、米国の詩人で主にイタリアに在住——、James Joyce——1882～1941、アイルランド生まれの英国の小説家——、それにF. Scott Fitzgerald——1896～1940、米国の小説家——達である。しかしヘミングウェイが本格的文学修業を始めた1924年以後、エズラ・パウンドと相見えることは絶えてなかったし、ジェームス・ジョイスとも親友同志であったとは言えなくなってくるのである。一方フィッツジェラルドとはどうであろうかと言えば、1940年、彼が世を去るまでの15年もの間、とにもかくにも継続したのである。

ヘミングウェイとフィッツジェラルドとの交遊録は次のように始まるとされている。

“A Moveable Feast”の一節に

The first time I ever met Scott Fitzgerald a very strange thing happened. Many strange things happened with Scott but this one I was

never able to forget. He had come into the Dingo bar in the rue Delambre where I was sitting with some completely worthless characters, had introduced himself and introduced a tall, pleasant man who was with him as Dunc Chaplin, the famous pitcher. I had not followed Princeton baseball and had never heard of Dunc Chaplin but he was extraordinarily nice, unworried, relaxed and friendly and I much preferred him to Scott.¹⁾

——初めて私がスコット・フィッツジェラルドに会った時、大変奇妙なことが起こった。スコットにはたくさんの奇妙なことがつきまとっているのであるが、この一件は私が決して忘れることのできなかったものである。彼は私が全くつまらない何人かの人達と一緒に坐っていたデランブル通りにあるディンゴーというバーに入って来て、まず自己紹介をし、それから背の高い、感じのよい男を、有名なピッチャーのダンク・チャップリンであると紹介した。私はプリンストン大学の野球のことについて気をつけていたわけではなかったので、ダンク・チャップリンという男のことは聞いたことがなかった。しかし彼は他の人とは違ったすばらしい人であり、ほがらかであり、リラックスしていて、親しみ深く、私はスコットより彼の方がずっと気に入った。——とあり、さらに最初の印象として次のように文章が続いている。

——Scott was a man then who looked like a boy with a face between handsome and pretty. He had very fair wavy hair, a high forehead, excited and friendly eyes and a delicate long-lipped Irish mouth that, on a girl, would have been the mouth of a beauty. His chin was well built and he had good ears and a handsome, almost beautiful, unmarked nose. This should not have added up to a pretty face, but

that came from the coloring, the very fair hair and the mouth. The mouth worried you until you knew him and then it worried you more.²⁾

——スコットはハンサムと可愛らしさの中間ぐらいの顔をした若者に見えた。波打つ見事な金髪と、広い額、興奮した親しそうな目、繊細な長い唇のアイランド人らしい口で、それがもし女性の口であったならばさぞ美しいことであろうと思わせた。彼のあごは形がよく整っていて、良い耳ときりっとした、美しいといってもよいほどの汚れない鼻をしていた。これだけ造作がそろっていても、美しい顔立ちというわけにゆくまいが、そんな風に見えるのは、その色合いと、すばらしい金髪と、口のせいであった。彼を知るまで、彼の口が気になるが、彼を知ると今度は、彼の口のことの方が尚更気になるのであった。——と書かれているのである。カーロス・ベーカー（Carlos Baker）もヘミングウェイ研究書の中で同様に取扱っている。

One day in May he was sitting on a bar stool at the Dingo in the rue Delambre, talking to Duff and Pat, when he heard a voice at his elbow. He looked up to see the man who had recommended him to Maxwell Perkins. Like Ernest, Fitzgerald was a Midwesterner, serious about his writing, imperious in his critical questioning, young, gay, generous, and enthusiastic. He was better dressed and far more prosperous than Ernest, beside whose manly bulk he looked both boyish and fragile. Fitzgerald introduced himself and the tall young man, a former Princeton athlete, who had entered the Dingo with him. Ernest liked the athlete at once but could not make up his mind about Fitzgerald. "He had very fair wavy hair," he wrote afterwards, "a high

forehead, excited and friendly eyes, and a delicate long-lipped Irish mouth that, on a girl, would have been the mouth of a beauty. His chin was well-built and he had good ears and a handsome, almost beautiful, unmarked nose.... The mouth worried you until you knew him and then it worried you even more.”³⁾

ここに描かれているフィッツジェラルド像は、大酒飲みで、ひ弱で、常にことあるごとに脈搏や体温計で自分の体調を気にし、割合と無責任な作家——誤字や脱字が多いので有名であるが——であり、家庭生活にも自信が持てず、女房の尻に敷かれた男とされ、更に

——I thought I ought to tell him about the tie, maybe, because they did have British in Paris and one might come into the Dingo——⁴⁾

——私はそのネクタイのことで注意してやらなければいけないと思った。というのは、パリにもイギリス人はいるし、イギリス人がディンゴーに入ってくることもあるかもしれない。——のようにネクタイの趣味にまでケチをつけられている。

ここで次の段階に入る前に、ヘミングウェイの遺作“A Moveable Feast”について少し述べておくことにする。

この本は1964年4月末に Scribners, New York から刊行され (Jonathan Cape, London から同時出版), たちまち世界中の話題となってヘミングウェイの名声の偉大さを示した一つとされているものである。原題の“A Moveable Feast”というのは、クリスマスのように日が一定しているのに対して、イースターのように年によって日が異なる祭日のことである。この本の場合、そのようなキリスト教的な連想はなかったにしても、どうしてこのような題目がつけられたかは、この本の扉に

If you are lucky enough to have lived in Paris as a young man, then wherever you go for the rest of your life, it stays with you, for Paris is a moveable feast.⁵⁾

Ernest Hemingway

to a friend, 1950

——もし君が、幸運にも青春時代にパリに住んでいたとするならば、君が残りの人生をどこで過ごそうと、それは君について廻る。なぜならば、パリは移動祝祭日であるからだ。アーネスト・ヘミングウェイ、ある友へ、1950年——と書いてあり、この本のモチーフになっている文句からはっきりすると思うのである。この本には1920年代のパリの姿が、修業時代のヘミングウェイの体験を通して、実にいきいきと描かれているのである。

第一章、St.-Michel広場のCaféに坐って牛乳入りのコーヒーを飲みながら、黙々と小説を書くヘミングウェイ、雨にぬれながら安アパートの八階にもどって行くと、愛妻のハドリー——最初の妻で1921年結婚、1927年離婚——が待っている。第二章、お高くとまっているような Gertrude Stein 女史との交際や、第三章の“Lost Generation”という言葉についての耳新しいエピソードもある。

また仲間の作家フィッツジェラルドについての叙述が非常に詳しく、時にはひどくすっぱ抜きもする。

——If the reader prefers, this book may be regarded as fiction. But there is always the chance that such a book of fiction may throw some light on what has been written as fact.⁶⁾

——もし読者が望むならば、この本は小説と考えてもよいのです。しかしこのような小説の本が、事実として記されたことに何らかの光を投ずる

という機会が常にあるものである。——と Preface の後半に述べられている。例えいくらかの誇張があるにしても、この本に描かれていることが、ヘミングウェイの人と作品に多くの光を投ずることは確かであって、彼の創作活動（生活）のようすもよくわかるし、当時のパリグループであるエズラ・パウンドやジェームス・ジョイスを始め、多くの作家が登場し、それらの関係も明るみに出ていて、ヘミングウェイ愛読者にとっては大変興味深いものの一つである。

例えば“The Sun Also Rises”(1926) を理解する上にも役立つし、“The Snow of Kilimanjaro”(1936) に出てくる回想風景のあるものは、本書の最終章、“There Is Never Any End to Paris”の中でオーストリア滞在中の経験と旨く重なることにも気がつくのである。またキリマンジャロの峯を仰ぎながら、死に瀕している小説家が、

*No, he had never written about Paris. Not the Paris that he cared about. But what about the rest that he had never written?*⁷⁾

——あ、そうだ。自分はまだパリについては一度も書いたことがないんだ。心にかけているあのパリについてはないんだよ。ところで、まだ一度も書いたことがない他のところについてはどうであろう。——というように残された仕事の整理にかかっていることを考えるならば、ヘミングウェイが晩年に至ってこの“A Moveable Feast”によってその宿題を果たしたと考えさせられるのである。

この本の成立の事情は、ヘミングウェイの4番目の妻、メアリーが巻頭につけているノートで明らかであろう。つまり、

Ernest started writing this book in Cuba in the autumn of 1957, worked on it in Ketchum, Idaho, in the winter of 1958~59, took it with

him to Spain when we went there in April, 1959, and brought it back with him to Cuba and then to Ketchum late that fall. He finished the book in the spring of 1960 in Cuba, after having put it aside to write another book, *The Dangerous Summer*, about the violent rivalry between Antonio Ordonez and Luis Miguel Dominguin in the bull rings of Spain in 1959. He made some revisions of this book in the fall in 1960 in Ketchum. It concerns the years 1921 to 1926 in Paris.

M. H.⁸⁾

——アーネストは1957年の秋に、キューバでこの本を書き始めた。1958～59年の冬には、アイダホ州ケッチャムでその仕事にかかり、私達が1959年4月にスペインに行った時は、それを携行し、キューバへも持ち帰り、それからその年の晩秋にはケッチャムへとそれを持ち戻った。彼は1959年、スペインの闘牛場でのアントニオ・オルドニエスとルイス・ミグエル・ドミンギンの間の烈しい張合いのことを取扱ったもう一つの本、『危険な夏』を書くために、こちらの方を棚上げにしていたが、遂に1960年の春にキューバでこの本を書き終えた。彼は更に1960年の秋にケッチャムでこの本のいくらかに手を加えた。これは1921年から1926年に至るパリを描いた本である。メアリー・ヘミングウェイ——

1957年ヘミングウェイが58才のとき書き始められ、1960年、彼が61才のときに書き終えられたものであり、この本の背景となっているものは、1921年～26年、つまりヘミングウェイが22才から27才までの修業時代を過ごしたパリであり、60才にもなる彼が35年も前の青春の頃を回想したこの文章には、無名時代の生活や、周囲の親しい友人たちについての楽しい思い出と共に、いくらかのほろ苦さや、悔恨や、ある人びとに対する意地悪な見方もまじっているものである。

2.

二人の交遊関係の中で、最初に相手の名前を口にしたのはフィッツジェラルドの方であった。同じく「失われた世代」の代表作家と称されながら、二人の文学の質は、およそ正反対と言えるような大きな相違をもっている。フィッツジェラルドの方が年令が三つ上で、文学的成功をおさめたのも数年早かったもので、何かにつけてフィッツジェラルドの方が先輩格であり、庇護者の立場にあったようである。彼は自分と関係の深いスクリブナーズ社(Scribners)に次のような手紙でヘミングウェイを紹介し、これが縁でヘミングウェイのその後の作品は同社から出されるようになったのであるから、ヘミングウェイはフィッツジェラルドの厚誼を大いに多としたと思われるのである。その紹介の手紙とは、「……この手紙を書いているのは、アーネスト・ヘミングウェイという青年について話したいからです。彼はパリに住んでいますが、アメリカ人です。そして『トランスアトランティック・レビュー』(Transatlantic Review)に寄稿しているすばらしく未来の可能性をもっている男です。エズラ・パウンドがパリのエゴティスト・プレス(Egotist Press)とかいう出版社から、彼の小品集を出版しました。——1924年春、パリでウィリアム・バード(William Byrd)が出版した『ワレラノ時代ニ』(in our time)のことであり、印刷はスリー・マウンテン・プレス社(The Three Mountains Press)であってエズラ・パウンドは直接出版に関していない。筆者加筆——ぼくは今ここに持っていませんが、注目に価するものです。今すぐにでも会いたい気がします。彼は本物です。……みじめな犬のように働いているので、この手紙は走り書きになってしまいました。」といささか昂ぶった調子でフィッツジェラルドは1924年10月18日付でスクリブナーズ社のマックスウェル・パーキンズ(Maxwell Perkins)宛てに紹介の手紙を書いたのである。

フィッツジェラルドがこれほどまでに激しく反応した作品とは、前の年に『三つの物語と十の詩』(Three Stories & Ten Poems)と題して出版され

た初期の作品集、および、後に短編集『われらの時代に』(In Our Time) の中で、中間章として使われることになった短いスケッチを集めた『ワレラノ時代ニ』(in our time) という二つの著作物であったようである。これらは名もない出版社から出されて、批評家の反応も冷やかなもののようであったが、そもそも、フィッツジェラルドとヘミングウェイの結びつきのお膳立てをしたのは、フィッツジェラルドのプリンストン大学 (Princeton University, New Jersey) 時代からの友人で、当時すでにアメリカで最も才気煥発の文芸評論家としてその名声を確立しつつあったエドモンド・ウィルソン (Edmund Wilson, 1895～1972) がその独創性に注目して、フィッツジェラルドに勧めたものであったようである。当時この無名に近い作家が、スクリブナーズと契約するまで、その間の関係者の手紙などに見られるのは、当のヘミングウェイの思惑と、ヘミングウェイを推せんするフィッツジェラルドの熱意であり、そしてそのフィッツジェラルドの直感と、ヘミングウェイの将来性に信頼を賭けたパーキンズの決断力にあったようである。更にこの手紙でパーキンズが初めてヘミングウェイのことを聞き、ヘミングウェイがのちのスクリブナーズ社の大作家となるきっかけになったとされているものである。

前にも述べたが、誤字や脱字の多いフィッツジェラルドであったようであるが、この手紙にも肝心のヘミングウェイの綴り Hemingway に m を重ねたり、出版社名もあやふやなものであったのに対し、パーキンズはすぐ「……海外から取り寄せることになるかも知れないが、まもなくアーネスト・ヘミングウェイのものが入手できるでしょう。……」と返事を書いている。彼はすぐさまヘミングウェイにも手紙を出していることが、フィッツジェラルド宛ての手紙から知ることができる。「……ヘミングウェイの件ですが、ようやく『ワレラノ時代ニ』を入手しました。むだのない、力強い、生氣あふれる筆法で描かれた一連のエピソードによって、恐ろしいまでの効果を積み重ねているようです。われらの時代の場面が、ヘミング

ウェイの目に映ったそのままに、見事に、しっかりと完璧に表現されているようです。プランがあったら知らせてくれるように、できれば原稿を送ってほしいと手紙を出しました。しかし本当のところ、手紙が届く望みはまずないでしょう。本を手に入れるのも苦勞したのですから。彼の住所知っていますか。……」と。

スクリブナーズ社から出版される前に、ヘミングウェイは最初の作品『われらの時代に』をアメリカで出版することを考え、人を介してその交渉を進め、2月始め、ボニ・アンド・リヴライト社 (Boni and Liveright) が出版に同意し、ヘミングウェイは3月5日そのリヴライト社に申し出を受諾する旨の電報をうち、3月31日に契約書に署名を終えて、1925年10月5日、ボニ・アンド・リヴライト社から出版されたのである。この短編集には、1924年のパリ版『ワレラノ時代ニ』に加えて、『インディアン部落』(Indian Camp), 『医師とその妻』(The Doctor and the Doctor's Wife), 『ある事の終り』(The End of Something), 『三日の嵐』(The Three-Day Blow), 加える予定であった『ミシガンの北』(Up in Michigan) はあまりにも性的であるとしてボニ・アンド・リヴライト社より忌避され、その穴埋めに書き上げた『拳闘家』(The Battler), 『非常に短い話』(A Very Short Story), 『兵士の故郷』(Soldier's Home), 『革命家』(The Revolutionist), 『エリオット夫妻』(Mr. and Mrs. Elliot), 『雨の中の猫』(Cat in the Rain), 『季節はずれ』(Out of Season), 『涯しない雪』(Cross-Country Snow), 『ぼくの親父』(My Old Man), 『大きな二つの心臓の川 I・II』(Big Two-Hearted River, Part I, Part II) などが入っていた。一人のアメリカ人が書いた処女短編集とは言え、これほど将来性を感じさせたものは今までにはなかったであろう、と言われながらも、無名作家の作品集などはそう簡単に売れるはずがないと思うのが妥当のようであろうが、それほどまでにボニ・アンド・リヴライト社は、いわばヘミングウェイの将来性に賭けていたということになるであろう。

ヘミングウェイ、フィッツジェラルドとの出会い

一方ヘミングウェイはこの時期の大半をオーストリアの山中で過ごしていたために、結局パーキンス自身がフィッツジェラルドに手紙が届く望みはないであろうと書いたように、最初の手紙は届かず、また再度の手紙もパリに戻ったあとで、他人から手渡されてことの次第を知ったなどの経緯は次の手紙でこと細く説明している。

To MAXWELL PERKINS, Paris, 15 April 1925¹

Dear Mr. Perkins:

On returning from Austria I received your letter of February 26 inclosing a copy of a previous letter which unfortunately never reached me. About ten days before your letter came I had a cabled offer from Boni and Liveright to bring out a book of my short stories in the fall. They asked me to reply by cable and I accepted.

I was very excited at getting your letter but did not see what I could do until I had seen the contract from Boni and Liveright. According to its terms they are to have an option on my next three books, they agreeing that unless they exercise this option to publish the second book within 60 days of the receipt of the manuscript their option shall lapse, and if they do not publish the second book they relinquish their option on the third book.

So that is how matters stand. I cannot tell you how pleased I was by your letter and you must know how gladly I would have sent Charles Scribner's Sons the manuscript of the book that is to come out this fall. It makes it seem almost worthwhile to get into Who's Who in order to have a known address.

I do want you to know how much I appreciated your letter and if I

am ever in a position to send you anything to consider I shall certainly do so.

I hope some day to have a sort of Doughty's Arabia Deserta of the Bull Ring, a very big book with some wonderful pictures.² But one has to save all winter to be able to bum in Spain in the summer and writing classics, I've always heard, takes some time. Somehow I don't care about writing a novel and I like to write short stories and I like to work at the bull fight book so I guess I'm a bad prospect for a publisher anyway. Somehow the novel seems to me to be an awfully artificial and worked out form but as some of the short stories now are stretching out to 8,000 to 12,000 words maybe Ill get there yet.

The [Paris] In Our Time is out of print and I've been trying to buy one to have myself now I hear it is valuable; so that probably explains your difficulty in getting it. I'm awfully glad you liked it and thank you again for writing me about a book.

Very Sincerely,

PUL

Ernest Hemingway

1. This is EH's first letter to Maxwell Perkins (1884~1947), who was to become his editor at Charles Scribner's Sons from 1926 onward. See A. Scott Berg, *Max Perkins: Editor of Genius* (New York, 1978).

2. An early⁹⁾ version of the idea that became *Death in the Afternoon* (New York, 1932).

つまり、前便の写しを同封した2月26日付の手紙を落手したが、それが着く10日ほど前にリヴライト社からの申し出に応じてしまったこと、手紙には大変興奮したが、リヴライト社からの契約書を見ないうちはどうしようもなかったこと、その契約条件によると、出版社側は今後3冊の本につ

ヘミングウェイ、フィッツジェラルドとの出会い

いてはオプションを要するが、2冊目については原稿を受けとってから60日以内に取捨いずれかに決めないと選択権は失効し、2冊目を出版しなければ3冊目についての選択権を放棄することになっている。自分としては『われらの時代に』をスクリブナーズ社に送りたかったこと、等々の内容のものである。

更にパーキンスとの文通を続けて、

To MAXWELL PERKINS, Paris, 9 June 1925

Dear Mr. Perkins:

I can't tell you how much I appreciated your sending me the copy of [the Paris] In Our Time. It was one of those very pleasant things that sometimes happen to one and which give a good feeling whenever they are remembered. Thank you ever so much.

Now I have finally gotten hold of another copy and am mailing it to you with this letter. Scott Fitzgerald is living here now and we see quite a lot of him. We had a great trip together driving his car up from Lyon through the Cote D'Or.¹ I've read his Great Gatsby [1925] and think it is an absolutely first rate book. I hope it is going well.

Thanks again for sending me the little book and with very best regards,

Yours sincerely,

PUL

Ernest Hemingway

1. See *A Moveable Feast* (New York, 1964), pp.154-76.¹⁰¹

のように1925年6月9日付の手紙では『ワレラノ時代ニ』が絶版のため著

者の手許にもないと聞いて、一部送り届けてきたパーキンズの好意を感謝した上で、推せん者であるフィッツジェラルドの『偉大なギャツビー』(The Great Gatsby, 1925年4月出版)のことも完全な一流の本であると思うと述べ、リヨンからパリまで一緒にドライブしたことを書き添えられている。

このようにしてスクリブナーズ社はボニ・アンド・リヴライト社に遅れをとり、『われらの時代に』はその年の秋10月に後者より出版されたのである。

ヘミングウェイはすぐさまフィッツジェラルドに次のような長い長い手紙を書いている。

To F. SCOTT FITZGERALD, Schruns, 31 December 1925—1 January 1926

Dear Scott:

Have just received following cable from Liveright——Rejecting Torrents of Spring Patiently awaiting Manuscript Sun Also Rises Writing Fully——

I asked them in the letter I sent with the Ms. to cable me their decision. I have known all along that they could not and would not be able to publish it as it makes a bum out of their present ace and best seller Anderson. Now in 10th printing. I did not, however, have that in mind in any way when I wrote it.

Still I hate to go through the hell of changing publishers etc. Also the book should come out in the late Spring at latest. That would be best. Later would not be bad but Spring would be ideal.

My contract with Liveright——only a letter¹——reads that in

consideration of theyre publishing my first book at their own expense etc. they are to have an option on my first three books. If they do not exercise this option to publish within 60 days of receipt of Ms. it lapses and if they do not exercise their option on the 2nd book it lapses for 3rd book. So I'm loose. No matter what Horace may think up in his letter to say.

As you know I promised Maxwell Perkins that I would give him the first chance at anything if by any chance I should be released from Liveright.

So that is that.

In the meantime I have been approached by Bradley (Wm Aspenwell) for Knopf.

In the meantime I have the following letter from Louis Bromfield.

Dear Ernest—Appropos of “Torrents of Spring” I received a letter today from Alfred Harcourt who replied at once to a line I had written/taking the liberty after talking with you/regarding the chances of your shifting publishers. He is very eager to see the Anderson piece and is thoroly familiar with your stuff—both in the magazines and In Our Time. In this connection he writes—*“Hemingway is his own man and talking off his own bat. I should say, Yea Brother, and we shall try to do the young man as much credit as he'll do us, and that's considerable. I'd like to see his Anderson piece. It's a chance for good fun, if not for too much money for either of us. Hemingway's first novel might rock the country.”*]

He also stands ready to advance money in case you need it, as soon as you like, provided you are free of Liveright and want to go to Harcourt. I was pleased to have so prompt and interested an answer,

though of course, it was to be expected. etc.

So that's that.

In any event I am not going to Double Cross you and Max Perkins to whom I have given a promise.

I will wire Liveright tomorrow A.M. to send Manuscript to Don Stewart care of the Yale Club, New York (only address I can think of tonight) and summarize by cable any propositions he may be making me in his letter.

It's up to you how I proceed next. Don I can wire to send Ms. to Max Perkins. You can write Max telling him how Liveright turned it down and why and your own opinion of it. I am re-writing *The Sun Also Rises* and it is damned good. It will be ready in 2~3 months for late fall or later if they wish.

As you see I am jeopardizing my chances with Harcourt by first sending the Ms. to Scribner and if Scribner turned it down it would be very bad as Harcourt have practically offered to take me unsight unseen. Am turning down a sure thing for delay and a chance but feel no regret because of the impression I have formed of Maxwell Perkins through his letters and what you have told me of him. Also confidence in Scribners and would like to be lined up with you.

You, however, are an important cog in the show and I hate to ask you to write even one letter when I know you are so busy getting away and all.

However there is the situation.

I dont know exactly what to write to Bromfield. Perhaps you will suggest something. In any event say nothing to Bromfield who has been damned decent, nor to anybody else in Paris till you hear from me.

I will wire Liveright in the morning (to send Ms. to Don at Yale Club). Then when I hear from you I can wire Don to send Ms to Maxwell Perkins. Write me Scribners' address.

Today is Thursday. You will get this letter on Saturday (perhaps). The mail boats leaving are the President Roosevelt on Tuesday and the Majestic and Paris on Wednesday. Mark your letter via one of the latter 2 ships and it will go fastest.

Have been on a long trip all day. Tired as hell. Chinook for ten days. Snow all gone to slush. Suppose that I will spend all my advance royalties on cables again this year. Oh yes. That reminds me that the advance I want is \$500. The advance I had on the Short Stories was \$200.

God it feels good to be out from Liveright with the disturbing reports I have had from Fleischman etc. Liveright supposed to have dropped \$50,000 in last theatrical venture. Has sold 1/2 business, sold Modern Library etc. They ought to get someone like Ralph Barton or [John] Held or [Miguel] Covarrubias to illustrate the torrents. It has 5000 more words than Don's first parody Outline of History [1921].

Well so long. I'm certainly relying on your good nature in a lousy brutal way. Anyway so long again and best love to Zelda and to you both from Hadley and

Ernest

New Years Morning P.S.

Got to worrying last night and couldnt sleep. Do you think I ought to go to N.Y.? Then I would be on the spot and could settle things without a six week lapse between every proposition. Also could be on

hand to make or argue any excisions on Torrents. If Liveright wants to hang onto me as his cable indicates could settle that. Also should get In Our Time plates if I change publishers. Etc. Meantime I have to wait at least 2 weeks more for my new passport. Old one ran out Dec. 20. Applied for new one Dec. 8 or 9—takes 5 weeks for it to come.

Well so long anyway. Bumby's very excited about going to get his new jockey cap, whip etc. I'm going down to get them through the Customs today.

Best to you always,

PUL

Ernest

1. The contract, dated 17 March 1925, is reproduced in facsimile in *In Their Time: 1920~1940* (Bloomfield Hills, Mich., 1977), p.42 recto. (LHC¹¹⁾)

果たして、リヴライト社からきた電報には『春の奔流』(The Torrents of Spring) は不採用、『日はまた昇る』の原稿完成を待つとあり、引き続き届いたホレス・リヴライト社主 (Horace Liveright) の手紙にも、こんなものをどこの誰が買うと思っているのか、2万部はおろか7~8百部も出ればいいところだ、出版することからしても悪趣味であるし、アンダソン (Sherwood Anderson, 1876~1941) に対してひどすぎると書かれている。カーロス・ベーカーはこの辺の事情について、次のように述べている。

Another editor in New York had recently approached Ernest with a letter of inquiry. This was Maxwell Perkins of Scribners. He had been stirred to action by one of his leading young authors, F. Scott Fitzgerald. Fitzgerald was certain that Hemingway would have a brilliant future. The short pieces Bill Bird had published were

remarkable. He was plainly “The real thing.” Perkins’s first letter to Ernest had miscarried. His second, sent while Ernest was in Austria, had been kept by Sylvia Beach with a pile of other mail. She handed it over to him only five days after he had accepted Horace Liveright’s offer. Ernest wrote Perkins about the contract he had lately signed. It gave Boni and Liveright an option on his next three books. Unless they took up the option within sixty days of receipt of a manuscript, the arrangement would lapse. Ernest said that he would have been glad to send *In Our Time* to Scribners. If he were ever in a position to submit another book to Perkins, he would do so. One possibility was a study of the bullfight. It would do for the matadors and the animals what Doughty had done for the nomadic people of the Arabian deserts. It would have to be a large book, filled with wonderful pictures. But such dreams, said Ernest, no doubt made him a poor prospect for an American publisher. Apart from bullfighting, his only other interest was the short story. He thought that the novel was an awfully artificial and worked-out form. Still, some of his stories were lengthening out towards 12,000 words. Maybe in time one might stretch to novel length.¹²⁾

そもそもヘミングウェイは修業時代に、アンダソンの短編を読んで感動し、その影響を強く受けていると言われている。1921年ヘミングウェイ夫妻が結婚してパリに赴くまで、アンダソンとヘミングウェイはシカゴにいて親交を結び、アンダソンはこの野心に燃える若い作家を励ましている。ヘミングウェイの処女短編の中でも秀作の一つとされている『ぼくの親父』はアンダソンの作品の影響を強く受けていると言われることに、うとましさを感じていたようである。当時アンダソンはリヴライト社のベストセラー作家であり、アメリカにおけるすぐれた諷刺文学として2万部はか

たいと思うといういささか気負った手紙を添えて『春の奔流』の原稿を送りつけたのもそのためであろうと思われる。次の手紙がそうである。

To HORACE LIVERIGHT, Paris, 7 December 1925

Dear Mr. Liveright:

I am sending you, with this letter, on the Mauretania tomorrow the Mss. of my new book *The Torrents of Spring*. Scott Fitzgerald has read the manuscript and was very excited about it and said he was going to write you about it. I don't know whether he did or not.

This is not the long novel which, so far, I am calling *THE SUN ALSO RISES* and which I am now re-writing and will be working on all this winter.

As you know in the golden age of the English novel Fielding wrote his satirical novels as an answer to the novels of Richardson. In this way *Joseph Andrews* was written as a parody on Richardson's *Pamela*. Now they are both classics. For a long time I've heard various critics bewailing the lack of an American satirist. Maybe when you read this book you will think they haven't so much bewailing to do now.

Louis Bromfield read the mss. also and said he thought it was one of the very funniest books he had ever read and a very perfect American satire.

On the practical side I think the book is the right length for a funny book. You do not want it too long. As it is you can make a full sized book of it by handling it as Doran's handled Don Stewart's books. It is some five thousand words longer than [Stewart's] *The Parody Outline of History* [1921]. A good sized page with lots of margin and room at

the bottom with the breaking up into chapters and the separate chapter headings and Author's notes in different type and spacing will give you plenty of length for a good sized book. Bromfield said he thought it was plenty long enough. I wish you would get Ralph Barton to illustrate it.

As you will see, although a satire it has a moving story, action all the time, never departs into the purely fantastic and mental, and is full of stuff. The humor is not Lardner's, Stewart's or Benchley's either. The book stands by itself.

If you take it you've got to push it. I have made no kick about the In Our Time, the lack of advertising, the massing of all those blurbs on the cover, each one of which would have made, used singly, a valuable piece of publicity but which, grouped together as they were, simply put the reader on the defensive; because I know that you believed you could not sell a book of stories and were simply building for the future. But this book you can sell and it must be given a real play. It should come out in the Spring.

The only reason I can conceive that you might not want to publish it would be for fear of offending Sherwood. I do not think that anybody with any stuff can be hurt by satire. In any event it should be to your interest to differentiate between Sherwood and myself in the eyes of the public and you might as well have us both under the same roof and get it coming and going.

If you take the book I want an advance of \$500. as that is the smallest guarantee I can have that the book will be pushed at all. I ought to ask for a thousand dollar advance because you have a book there of which, if you get some one like Ralph Barton to illustrate it,

and push it as you know how, you can sell 20,000 copies. I would rather wait for royalties and not have you think I am trying to hold you up. Funny books are not too easy to get hold of. This one has the advantage of starting with all the people who have read Black [Dark] Laughter [1925] to sell first and when it gets started it will be awfully hard to stop. It does not depend on Anderson for its appeal, but it has that to start with. It should start plenty of rows too. And anybody who has ever read a word by Anderson will feel strongly about it—one way or the other. My address for the next three months will be

HOTEL TAUBE, SCHRUNS, VORARLBERG, AUSTRIA.

Will you please cable me there, at once, your decision on The Torrents of Spring as in case you do not wish to publish it I have a number of propositions to consider. I want you to publish it, though, because it is a hell of a fine book and it can make us both a lot of money.

With best regards,

yours always,

LHC

Ernest Hemingway¹³⁾

1925年にアンダソンが書いた小説『暗い笑い』(Dark Laughter, 1925)はヘミングウェイに言わせれば、もったいぶったいいちきな作品であり、ヘミングウェイは夏から秋にかけて『日はまた昇る』の最初の草稿を完成していた時期になるが、11月にはわずか一週間で、ミシガン州のある二人の男の人生に春分が与えられる影響を寓話仕立てにしたものを書き上げた。これが『春の奔流』であり、第一部のタイトル『赤と黒の笑い』(Red and Black Laughter)から明らかにこの年発表されたアンダソンの『暗い笑い』のもじり——パロディーである。さらに長い長い手紙の中で、とにかく

く以前からの約束ごとでもあり、きみやパーキンズを裏切るつもりはないが、すでにハーコート（Alfred Harcourt）からは前金も出すと言って来ているし、もし原稿を先にスクリブナーズ社に送って拒否されたりしたら、大変だと訴えた。それは大晦日のことであったが、眠れぬ一夜を過ごした彼は、元日の朝になって、ニューヨークに行ったものかどうか、旅券は切れていて、すぐには発てないと追伸に書き足している。その頃、ヘミングウェイの書いた『春の奔流』はアンダソンがリヴライト社の花形作家であったがために、リヴライト社との契約破りのために利用したのではないかと言う疑いが持たれるようになるのである。がしかし、ヘミングウェイはその疑いを常に否定していたようである。さらにフィッツジェラルドはヘミングウェイがスクリブナーズ社のパーキンズ傘下に加わることを望んでいたこともあって、この計画に彼も一枚加わっているのではないかという説も出されたりしていたのである。フィッツジェラルドについても、リヴライトの編集長T. R. スミス宛ての手紙で「……アーネスト・ヘミングウェイが先日、新作（諷刺小説『春の奔流』）を見せてくれましたが、あなたがたにこの新作を引き受けてもらえるかどうか、いささか気がかりな様子でした。私の意見が何ほどの価値があるにしても、あなたがたがそれをどの程度に評価して下さるか存じませんがご参考までに申し上げます。——中略——率直に申し上げますと、私はこれはあなたがたの気に入らなければよいのですが、などと考えています。という理由は、私はスクリブナーズ社のたいこ持ちみたいなもので、いつの日か私の尊敬する同世代人がみんな同じ傘下に集まってくるのを夢見ているからです。しかし私の熱烈な肩入れと、自らの懸念を承知しているアーネストのことゆえ、私がここで申し上げたようなことが突破口となって、途方もない、尋常ならざる産物が日の目を見ることになるやも知れないということに、彼も同意してくれた次第です。……」のように『春の奔流』の出版を説得している事実を反証としてあげられるのである。カーロス・ベーカーもこうした一連の

ことについて次のように触れている。

She had been in Schruns about ten days when Ernest got the news from Horace Liveright about the book she had so much admired. "REJECTING TORRENTS OF SPRING," said the cable, "PATIENTLY AWAITING MANUSCRIPT SUN ALSO RISES WRITING FULLY." To Ernest, who at once sent Fitzgerald a long explanatory letter, the cable was scarcely a surprise. He had known all along that Liveright could not and would not publish something that "made a bum" out of the firm's current ace and bestseller. The contract with Liveright was nothing but a letter; yet it stated very clearly that their option on his first three books would lapse if they rejected Book Number Two. This they had just done. "So," said Ernest, "I'm loose."

He was also in mild demand. Max Perkins at Scribners had written last winter, as of course Fitzgerald knew. Bill Bradley at Knopf had lately sent a letter of inquiry. And Louis Bromfield, whose publisher was Harcourt, Brace, had just sounded out Alfred Harcourt's opinions on Hemingway. Harcourt said that Ernest's first novel might rock the country. He agreed to advance any reasonable sum if Ernest should decide to change publishers. Ernest's immediate inclination was to keep his promise to Max Perkins. The steps were clear enough. First, he would cable Liveright to hand over the manuscript to Don Stewart at the Yale Club. Don could then submit it to Perkins. *The Sun Also Rises* ought, he felt, to help in the bargaining.

Following a worried and sleepless night, Hemingway added a New Year's-morning postscript to his letter to Fitzgerald. He had begun to think seriously of a quick trip to New York. It would then be possible

to settle matters on the spot, make any required changes in *The Torrents*, and even commandeer the plates of *In Our Time*. He would have to wait until mid-January for a new passport, his old one having lapsed before Christmas. Meantime he would go down to the custom house to claim the small jockey cap, with whip and silks, which the Fitzgeralds had sent Bumby as a Christmas gift to complement the new rocking horse¹⁴⁾.

3.

パリにたむろしながら文学修業をしていた国籍離脱者 (expatriates) たちの中で、フィッツジェラルドが最も強い印象を受けたのがアーネスト・ヘミングウェイであり、この二人が実際に顔を合わせたのが1の中の引用文にあったように、1925年5月、パリのディンゴ・バーという酒場においてであった。当時フィッツジェラルドは28才で『偉大なギャツビー』の出版を目前にしており、その人気は頂点に達しようとしていたのである。一方ヘミングウェイは3才年下の25才、当時のアメリカの読者には全く無名の存在であり、毎日の生活費を稼ぐにも悪戦苦闘の連続であったようである。しかしこの両者が作家としてのその後に描く軌跡も対照的で、『偉大なギャツビー』以後次第に下降線を辿るフィッツジェラルドに対して、ヘミングウェイは翌年『日はまた昇る』を発表してからは、大作家としての道を歩むことになるのである。従って、1925年という年は、この二人の作家にとって、直角に近い角度で交叉していることになるのである。

ヘミングウェイとの念願の対面をしたフィッツジェラルドは、ますます彼に好意をいただき、パーキンズに宛てた手紙の中で「……彼はまだ若く、故国から遠く離れて心細い思いをしているようです。彼に会ったらきっと気に入ると思います。とにかく彼は今迄に出会った中でも最高の人物です。……」と紹介しているのである。ヘミングウェイは1925年10月、

ボニ・アンド・リヴライト社より出した『われらの時代に』の好評に、より有力な出版社を望んでいたのも確かであったようであり、次作の『春の奔流』が同社のアンダソンの新作を茶化したものであったことから、彼には都合がよかったことになり、契約は破棄されることになるのである。これでフリーになれると思ったようであるが、次の出版社をスクリブナーズ社とハーコート社のどちらにするかについてはまだ決めかねていたようである。しかし、スクリブナーズ社の破格の待遇（ハーコート社は『春の奔流』に500ドル、『日はまた昇る』に1000ドルに対して『春の奔流』と未完の小説の先買権として合わせて1500ドル、印税は一律15%）を受けることになり、その足ですぐハーコート社を訪ねて、スクリブナーズ社と契約したことを話すと、ハーコート社はまたチャンスがあったらいつでもどうぞという理解あるところを見せてくれたということである。結局スクリブナーズ社のパーキンズは、ヘミングウェイの新しい長編小説と例のパロディーの両方の出版を、現物に直接目を通すことなく了承したとされているのである。これは前述のごとく、フィッツジェラルドの熱意もさることながら、パーキンズがヘミングウェイの将来性をかたく信じたということであり、それと同時にフィッツジェラルドの直観力にも信頼を置いたことを物語るものである。このような経緯をたどって出版されたのが『日はまた昇る』である。結果的にこの作品によって“失われた時代”の作家としての地位が確立されていくのである。

もともとこの本が出版される前、ヘミングウェイとフィッツジェラルドとの間に文学的な意見の交換も行われていたようである。つまりヘミングウェイは『日はまた昇る』の原稿をカーボン紙にとったコピーをフィッツジェラルドに見せ、フィッツジェラルドは自分の意見を十分にメモして、すばらしい本であるが、初めの数章の中の若干の個所を削除するように勧め、その意見が大いに正当なものに思えたヘミングウェイは、ほとんど即座にタイプ原稿の初めの15ページ——ブレット・アシュリー（Brett

Ashley) とマイク・キャンベル (Mike Campbell) の生いたちの部分と、語り手のジェーク・バーンズ (Jake Barnes) の自伝の部分——を削除することにしたということである。この部分のおおかたは、小説の後の方で明らかにされるが、あるいは何らかの方法で説明されたりしているのである。そしてその旨をすぐパーキンズに書き送り、パーキンズもこの変更に同意し、さらに次のような感想を伝えて来たとカーロス・ベーカーは述べている。

Max Perkins agreed to the change and wrote that he thought the whole novel “a most extraordinary performance. No one could conceive of a book with more life in it. All the scenes, and particularly those when they cross the Pyrenees and come into Spain, and when they fish in that cold river, and when the bulls are sent in with the steers, and when they are fought in the arena, are of such a quality as to be like actual experience.”¹⁵⁾

『日はまた昇る』の出版に至るまでと、その後の活動に対して、フィッツジェラルドがヘミングウェイに示した友情と献身とさまざまな援助——金銭的援助も含めて、特に1928年12月6日ヘミングウェイの父親の自殺に際して、最初パーキンズに100ドルの金を用意して、北フィラデルフィア (North Philadelphia, Penn.) 駅に届けてくれるよう頼むのであるが返事がなく、結局フィッツジェラルドに用立てしてもらった。——は並大抵のものではなく、ヘミングウェイは大いに感謝している様子や気持が次の手紙に明確に表れている。

To F. SCOTT FITZGERALD, Oak Park, Illinois,
c. 9 December 1928

Dear Scott :

You were damned good and also bloody effective to get me that money—I had like a fool only 35~40 bucks with me after Xmas Shopping——plenty for food and tips enroute to Key West.¹

My Father shot himself as I suppose you may have read in the papers. Will send you the \$100 as soon as I reach Key West——or have Max Perkins send it——

Thanks again like hell for your werry admirable *performance* as we say in the automotive game.

I was fond as hell of my father and feel too punk——also sick etc.——to write a letter but wanted to thank you.

Best to Zelda and Scotty——

Yrs always

PUL

Ernest

1. EH and Bumby were on a Florida-bound train from New York City when a telegram delivered at Trenton, New Jersey, told EH of his father's death. He wired Fitzgerald for a loan, left Bumby in care of the Pullman porter, and at Philadelphia caught a train for Chicago^{1,6)}

ヘミングウェイはフィッツジェラルドを我が最愛の友と呼び、自分の熱烈な友情はとても言葉で表現し尽くせるものではない、と言えばフィッツジェラルドの方も『日はまた昇る』のアメリカにおける反響に満足している様子についてカーロス・ベーカーが次のように書いている。

Fitzgerald wrote from Washington that he was delighted with the American reception of *The Sun*. "I can't tell you," he continued, "how much your friendship has meant to me during this year and a

half—it is the brightest thing in our trip to Europe for me.” John Peale Bishop had a drink with Ernest shortly before Christmas and showed him a letter just received from Edmund Wilson. Wilson had remarked to Bishop that *The Sun Also Rises* was the best novel by anyone of Hemingway’s generation. Malcolm Cowley discovered that winter that Hemingway’s “influence” was spreading “far beyond the circle of those who had known him in Paris.” Girls from Smith College, coming to New York, “were modeling themselves after Lady Brett.... Hundreds of bright young men from the Middle West were trying to be Hemingway heroes, talking in tough understatements from the sides of their mouths.” Thornton Wilder, then living in New Haven, reported that the Yale undergraduates were much impressed with *The Sun*, and that his own new novel contained a passage which he ardently hoped was Hemingwayesque¹⁷⁾.

つまりこの作品は同世代の人による最良の小説であり、マルカム・カウリー (Malcolm Cowley, 1898～ , アメリカの詩人・批評家) やソーントン・ワイルダー (Thornton Wilder, 1897～ , アメリカの小説家・劇作家) 達による好評ぶりも書き添えている。特にマルカム・カウリーは、ヘミングウェイの影響力がパリで彼を知っていた人々の範囲をはるかに越えて広まっていることを知ったということでもある。

彼の名声は読者の間にも着実に高まりつつあり、パーキンズが予言した通り勢いを失うことなく、“The Sun has risen……and is rising steadily”¹⁸⁾ という言葉がその状況を集約している。

1927年、リヴライト社の若い共同経営者ドナルド・フリード (Donald Friede) がジェノヴァ (Genoa, Italy) に滞在していたヘミングウェイに、もう一度同社に復帰してもらう説得工作のため大西洋を渡り、他社にはな

い新しい契約を提示するのであるが、ヘミングウェイはスクリブナーズ社に留まることに全く満足していることを伝え、心を動かされることなくその提案も即座にしりぞけている。

丁度この頃再婚を控えていたヘミングウェイと別居中（100日間）の妻ハドリーとの状況についてカーロス・ベーカーは次のように述べている。

Ernest waited until Hadley's return before he answered her letter. As always, he told her, she had been brave, unselfish, and generous. He said that he had written to both Scribners and Jonathan Cape asking them to assign to her all royalties from *The Sun Also Rises*. Having done so much to hurt her, he could at least do this to help her. After all, he said, she had supported him with her patrimony while he wrote all his early books, and he could never have done them without her loyal, self-sacrificing, stimulating, loving, and "actual cash-support." As for himself he could always borrow from the "wealthy"—Fitzgerald or MacLeish or Murphy—or accept donations from Pauline's Uncle Gus, who was more than eager to help his niece. Finally, in a sweeping and magnanimous gesture, he told Hadley that he was making a new will. The income from all his books, past and future, would be paid into a trust fund for Bumby. The boy's best luck, he said, was to have Hadley for a mother—with all her straight thinking, her good head and heart, and her lovely hands. She was the best, truest, and loveliest person Ernest had ever known.

Next evening Hadley replied straightforwardly: divorce proceedings might now begin. The three-month separation agreement was cancelled. She would accept the assignment of the royalties with due thanks. If she decided to return to America during the divorce

proceedings, she would take the boy to see his grandparents in Oak Park. Would Ernest please collect his suitcases, which he had left in her dining room? And would he be sure to eat well, sleep well, keep well, and work well? She closed the letter “with Mummy’s love.”¹⁹⁾

つまり、その印税は自分の方から、初期の本を書いている頃の親譲りの財産で援助してくれたこと、励ましと愛情に満ちた援助のこと、二人の間にできた子供、バンビ（John Hadley Nicanor Hemingway, 1923. 10. 10生まれ）のための信託基金にすること、などを含めた離婚の慰謝料代わりに譲渡したい旨の申し入れをし、妻のハドリーからの返事の手紙には、離婚の手続きを始めてもよいこと、100日間の別離協定は取り消すこと、印税の譲渡に関する感謝の気持ち、などが含まれ、結局その印税は彼のところには一文も入って来なかったこともあったが、まもなく著作権については回復している。

1928年11月19日、フィッツジェラルドとヘミングウェイは1926年の夏以来初めて再会することになり、ヘミングウェイ夫妻——二度目の妻、ポーリン・プファイファー（Pauline Pfeiffer）——と同行していた画家マイク・ストレイター（Henry Strater）はプリンストンのパーマー・スタジアム（Palmer Stadium, Princeton）でのイエール大学とプリンストン大学（Yale-Princeton game）とのフットボール試合を観戦している。

その直後の12月6日、10月にオーク・パーク（Oak Park）で会った時の今までになく意気消沈し、顔色の悪かった父親に励ましの手紙を書いているのであるが、キー・ウェスト（Key West）に向かって南下している途中の駅・トレントン駅（Trenton）に、オーク・パークに住んでいた妹のキャロル（Carol、——ヘミングウェイは6人兄弟で、上から順番に、長女 Marcelline、長男 Ernest（本人）、次女 Ursula、三女 Madelaine、四女 Carol、次男 Leicester Clarence となっている。——）からアーネスト宛

てに電報が届けられていて、それが父親の死を知らせるものであったのである。糖尿病と狭心症を患っていた上に、フロリダの不動産に投資したのが失敗して、財政難に陥っていた父親のヘミングウェイ医師はピストル——Old Smith and Wesson 32 revolver——で自殺を遂げたというのである。前述したようにフィッツジェラルドがお金の用立てをしたのがこの時である。

4 .

フィッツジェラルドの長編小説は1929年春になっても完成しない状態の中、ヘミングウェイは自分の制作がうまくいっていないにもかかわらず、次のような説教の言葉を吐いている。

In spite of his own writing difficulties, Ernest played Dutch uncle to Fitzgerald, repeatedly urging him to get forward with *Tender Is the Night*. The only thing to do with a novel, said he, was to finish it. Scott's mood of depression was nothing but the Artist's Reward. Summer was anyhow a discouraging time to work: only in the fall, when the feeling of death came on, did you find "the boys" putting pen to paper. The good parts of a novel might be something a writer was lucky enough to overhear or they might be the wreckage of his whole damned life. The artist should not worry over the loss of his early bloom. People were not peaches. Like guns and saddles, they were all the better for becoming slightly worn. When a bloomless writer got his flashes of the old juice, he knew enough to get results with them.²⁰⁾

小説に関してなすべき唯一のことと言え、それを仕上げることだけである、とか、芸術家たるもの若い盛りが過ぎてしまったことでくよくよ思い悩むべきでないし、人間は銃や鞍のように少し使い古されてからの方がよいのだ、などと、ヘミングウェイはその二作目の長編がまだ出ていない30才の比較的若い作家というよりは、50才を過ぎたゴマ塩頭のベテラン作家のような口のきき方をして説教したというのである。1929年の春から夏にかけてのフィッツジェラルドとヘミングウェイの出合いは、二人の間に新たなひずみをもたらし、フィッツジェラルドは深酒にのめりこみ、完成しない長編小説に弁解がましい態度をとったり、逆にヘミングウェイには楽観的な報告を送ったりしていたようである。そして1933年頃になると、ヘミングウェイは『清潔な明るい場所』（“A Clean, Well-Lighted Place”）、『スイス国へ敬意をこめて』（“Homage to Switzerland”）、『医者よ、処方箋をくれ』（“Give Us a Prescription, Doctor”）——これは後に『賭博者と尼僧とラジオ』（“The Gambler, The Nun and The Radio”）と改題されている——の三作の短編を仕上げたところで、フィッツジェラルドのような書かない作家をかつて以上に激しくコキおろすようにまでなるのである。フィッツジェラルドが救われるのは次の二つの場合しか考えられないという考えなのである。つまりその二つとは、彼の妻ゼルダ（Zelda）——ヘミングウェイ夫妻とゼルダとの関係、交際については次筆にまわすことにして——が死ぬか、それとも彼がひどく胃を悪くして酒が飲めない状態になるかのいずれかであるというのである。

それにしてもなぜ彼はいつまでも成長しようとししないのか、なぜ彼はいつ会っても酔っ払っているのかが鼻についてきたというのである。しかし激励することも忘れていなかったなのである。1934年4月12日出版の『夜はやさし』（*Tender Is the Night*）について、長い、忌憚のない、おじさん口調で、訓戒調の手紙がこれである。

TO F. SCOTT FITZGERALD, Key West, 28 May 1934

Dear Scott:

I liked it and I didn't like it [*Tender Is the Night*]. It started off with that marvelous description of Sara and Gerald (goddamn it Dos took it with him so I can't refer to it. So if I make any mistakes——). Then you started fooling with them, making them come from things they didn't come from, changing them into other people and you can't do that, Scott. If you take real people and write about them you cannot give them other parents than they have (they are made by their parents and what happens to them) you cannot make them do anything they would not do. You can take you or me or Zelda or Pauline or Hadley or Sara or Gerald but you have to keep them the same and you can only make them do what they would do. You can't make one be another. Invention is the finest thing but you cannot invent anything that would not actually happen.

That is what we are supposed to do when we are at our best——make it all up——but make it up so truly that later it will happen that way.

Goddamn it you took liberties with peoples' pasts and futures that produced not people but damned marvellously faked case histories. You, who can write better than anybody can, who are so lousy with talent that you have to——the hell with it. Scott for gods sake write and write truly no matter who or what it hurts but do not make these silly compromises. You could write a fine book about Gerald and Sara for instance if you knew enough about them and they would not have any feeling, except passing, if it were true.

There were wonderful places and nobody else nor none of the boys can write a good one half as good reading as one that doesn't come out by you, but you cheated too damned much in this one. And you don't need to.

In the first place I've always claimed that you can't think. All right, we'll admit you can think. But say you couldn't think; then you ought to write, invent, out of what you know and keep the people's antecedents straight. Second place, a long time ago you stopped listening except to the answers to your own questions. You had good stuff in too that it didn't need. That's what dries a writer up (we all dry up. That's no insult to you in person) not listening. That is where it all comes from. Seeing, listening. You see well enough. But you stop listening.

It's a lot better than I say. But it's not as good as you can do.

You can study Clausewitz in the field and economics and psychology and nothing else will do you any bloody good once you are writing. We are like lousy damned acrobats but we make some mighty fine jumps, bo, and they have all these other acrobats that won't jump.

For Christ sake write and don't worry about what the boys will say nor whether it will be a masterpiece nor what. I write one page of masterpiece to ninety one pages of shit. I try to put the shit in the wastebasket. You feel you have to publish crap to make money to live and let live. All write [right] but if you write enough and as well as you can there will be the same amount of masterpiece material (as we say at Yale). You can't think well enough to sit down and write a deliberate masterpiece and if you could get rid of [Gilbert] Seldes and those guys that nearly ruined you and turn them out as well as you can

and let the spectators yell when it is good and hoot when it is not you would be all right.

Forget your personal tragedy. We are all bitched from the start and you especially have to be hurt like hell before you can write seriously. But when you get the damned hurt use it——don't cheat with it. Be as faithful to it as a scientist——but don't think anything is of any importance because it happens to you or anyone belonging to you.

About this time I wouldn't blame you if you gave me a burst. Jesus it's marvellous to tell other people how to write, live, die etc.

I'd like to see you and talk about things with you sober. You were so damned stinking in N. Y. we didn't get anywhere. You see, Bo, you're not a tragic character. Neither am I. All we are is writers and what we should do is write. Of all people on earth you needed discipline in your work and instead you marry someone who is jealous of your work, wants to compete with you and ruins you. It's not as simple as that and I thought Zelda was crazy the first time I met her and you complicated it even more by being in love with her and, of course you're a rummy. But you're no more of a rummy than Joyce is and most good writers are. But Scott, good writers always come back. Always. You are twice as good now as you were at the time you think you were so marvellous. You know I never thought so much of Gatsby at the time. You can write twice as well now as you ever could. All you need to do is write truly and not care about what the fate of it is.

Go on and write.

Anyway I'm damned fond of you and I'd like to have a chance to talk sometimes. We had good times talking. Remember that guy we went out to see dying in Neuilly? He was down here this winter.

Damned nice guy Canby Chambers. Saw a lot of Dos. He's in good shape now and he was plenty sick this time last year. How is Scotty and Zelda? Pauline sends her love. We're all fine. She's going up to Piggott for a couple of weeks with Patrick. Then bring Bumby back. We have a fine boat. Am going good on a very long story. Hard one to write.

Always your friend

Ernest

What about The Sun also and the movies? Any chance?

I dint put in about the good parts. You know how good they are. You're write [right] about the book of stories [*Winner Take Nothing*]. I wanted to hold it for more. That last one I had in Cosmopolitan would have made it.[☆]

PUL

☆For Fitzgerald's balanced reply to this letter, dated 1 June 1934, see *The Letters of F. Scott Fitzgerald*, ed. Andrew Turnbull (New York, 1963), pp. 308-10.²¹³

つまり、最初自分はこの小説の長所を過大に評価し、その短所を強調しすぎたきらいがあった。明らかにきみはあり余るほどの才能の持主であるが、今度の小説に限っては余りにもズルをやりすぎている。問題はきみが自分の疑問に対する答えにだけ身を傾けても、広く聴くということをとるの昔に止めてしまっているということである。これは作家を涸渇させるものである。きみは個人的な悲劇を忘れなくてはならない。とにかく最初からうまくいく人間なんて一人もいないし、きみだって真剣に書けるようになるにはとてつもなく傷つかなければいけない。きみの義務は書くものの

中で、痛んだ心を使うことであって、それから逃れることはできない。二人とも悲劇の人物という柄でなく、書かなければならない作家でしかない。立派な作家というのは飲んだくれだがいつも立ち直ることができるものである。今のきみは『偉大なギャツビー』の当時より2倍も立派である。だったら、どんどん書けばいいんだ。という内容である。これに対して同じくらい真面目な内容の返事が折り返しヘミングウェイのもとに届いている。

Scott's reply came by return mail, three times longer than Ernest's and just as serious. Scott said that his friend's "old charming frankness" had dispelled the "foggy atmosphere" that had grown up between them in recent years. "I think it is obvious," said he, "that my respect for your artistic life is absolutely unqualified, that save for a few of the dead and dying old men you are the only man writing fiction in America that I look up to very much. There are pieces and paragraphs of your work that I read over and over—in fact, I stopped myself doing it for a year and a half because I was afraid that your particular rhythms were going to creep in on mine by a process of infiltration."²²⁾

昔ながらの嬉しい率直さのおかげでこの数年間二人の間に生じていた霧のような雰囲気霧散したというのである。また、きみの芸術生活に対するぼくの尊敬の念は絶対的に無条件のものであり、また、死んでいる、あるいは死の間近い老人の数人を除けば、アメリカの小説家のうちで、ぼくが非常に尊敬しているのはきみ一人である。きみの仕事のうちぼくが何度もうり返して読んでいる作品や節があります。というよりむしろ、きみ独特の文のリズムが浸透作用のようにぼくの文章の中に乗り移ってくるのが怖くて、この1年半ぐらひはきみの文章を繰返し読むのを止めているくらいです。

- 注 1) A Moveable Feast. Scribners. 1964 P. 149
2) Ibid. P. 149
3) Ernest Hemingway, A Life Story. Carlos Baker. Bantam Books. 1970
P. 188
4) A Moveable Feast. Scribners. 1964 P. 150
5) Ibid. 本扉
6) Ibid. Preface
7) The First 49 Stories. Jonathan Cape. P. 70
8) A Moveable Feast. Scribners. 1964 Note
9) Ernest Hemingway, Selected Letters. 1917-1961 Scribners. P.P.
156-7
10) Ibid. P.P. 162-3
11) Ibid. P.P. 183-5
12) Ernest Hemingway, A Life Story. Carlos Baker. Bantam Books. 1970
P.P. 186-7
13) Ernest Hemingway, Selected Letters. 1917-1961 Scribners P.P.
172-4
14) Ernest Hemingway, A Life Story. Carlos Baker. Bantam Books. 1970
P. 210
15) Ibid. P.P. 220-1
16) Ernest Hemingway, Selected Letters. 1917-1961 Scribners P. 291
17) Ernest Hemingway, A Life Story. Carlos Baker. Bantam Books. 1970
P. 232
18) Ibid. P. 234
19) Ibid. P. 229
20) Ibid. P.P. 261-2
21) Ernest Hemingway, Selected Letters. 1917-1961 Scribners P.P.
407-9
22) Ernest Hemingway, A Life Story. Carlos Baker. Bantam Books 1970
P.P. 335-6

参考文献

1. Ernest Hemingway, Selected Letters. 1917-1961 by Carlos Baker. Scribners
2. Ernest Hemingway : A Life Story by Carlos Baker. 1970 A Bantam Book
3. Ernest Hemingway : The Snows of Kilimanjaro and Other Stories. Scribners
4. Ernest Hemingway : The Sun Also Rises. Scribners
5. Ernest Hemingway : The Torrents of Spring. Scribners

6. Ernest Hemingway : An Introduction and Interpretation by Sheridan Baker.
Holt, Rinehart and Winston, Inc.
7. Ernest Hemingway by Philip Young. University of Minnesota Press.
8. フィッツジェラルドとヘミングウェイ——失敗の権威と成功の権威——マ
シュー・J・ブルックリ著 岡本紀元・高山吉張訳 あぽろん社
9. ヘミングウェイ, キューバの日々, ノルベルト・フェンデス, 宮下嶺夫訳 晶
文社
10. 天才の発見, 名編集者M・パーキンズとその作家たち, 永岡定夫・坪井清彦著
荒地出版社
11. 現代アメリカ文学, 龍口直太郎・吉武好孝編 有信堂
12. ヘミングウェイ・テーマと研究 (Ⅳ) 野崎 孝著 研究社
13. アメリカ文学の研究 三木信義著 開文社出版
14. Ernest Hemingway ; A Moveable Feast. Scribners
15. Hemingway by Kenneth S. Lynn. Simon Schuster
16. ザ・スコット・フィッツジェラルド・ブック 村上春樹 TBSブリタニカ
17. フィッツジェラルドの文学“アメリカの夢”とその死 刈田元司編 荒地出版
社
18. 20世紀英米文学案内 フィッツジェラルド 野崎 孝編 研究社
19. フィッツジェラルドの手紙 愛の挫折の生涯から 永岡定夫・坪井清彦編 荒
地出版社
20. ゼルダ——愛と狂気の生涯——ナンシー・ミルフォード, 大橋吉之輔訳 新潮
社
21. The Torrents of Spring from The Hemingway Reader by Charles Poore,
Macmillan.